

児童、保護者の皆様、ご入学・ご進級、まことにおめでとうございます。校長 辻 太一郎（つじたくお）と申します。どうぞよろしく願いいたします。

かつて桜は入学式を彩る存在でした。ところが実際は、1988年の4月2日を最後に、それ以降4月の開花はないそうです。一方、自然は誰に忖度するわけでもなく、ただひたすらその環境に適応しながら生のサイクルを繰り返しています。今、目の前にある自然を楽しみ感謝することが人としての節度なのだと思います。花びらが散った後の桜の枝に目を向けると、若々しく美しい葉が力強く芽吹き始めています。子どもたちが希望を胸に新しい世界の扉を開く今、この新緑もまた、それを彩るのにふさわしい存在だと言えます。

さて、本校は今年で創立149年目を迎えます。校長室には、歴代校長の写真が飾られており、総勢41名です。それぞれの校長に歴史あり。第15代校長の頃は、太平洋戦争真っ只中、第16代校長の頃は、終戦とその後の混乱期でした。第38代校長は、東日本大震災を経験しました。いずれの時代も学校現場がかなり混乱していたことは容易に想像できますが、その当時の志津小学校の子どもたちは、その時何を思いどう過ごしていたのだろうか、校長の写真を見るたびにそう思わずにはいられません。五木寛氏のエッセイ「大河の一滴」には、困難を乗り越えるための次のような提言が書かれています。「現状を嘆くばかりでなく何ができるか考えて行動すること」「笑いや感動を絶やさないこと」「どんな状況下でもあいさつ等の社会的なマナーや習慣を失わないこと」。

数十年後の校長室で、新しい志津小校長が第42代校長の写真をしみじみと眺めながら「この校長の時代は、世界的な新型コロナウイルス蔓延という大変な時代だったのだなあ」と思うでしょう。またこうも考えるはずです。「この時代の子どもたちは、どう過ごしていたのだろうか」と。その答えは、五木寛之氏の言う3つの提言そのままです。また「学校と保護者の協力・連携」という強固な土台があったからこそ成し得たということも、忘れてはなりません。そのようにして志津小の子どもたちは、新型コロナウイルス蔓延以来2年間を乗り越えてきたのです。

この2年間で心を耕す期間だったとすれば、令和4年度は「夢」の種を植え育てる年にしたいと考えています。子どもたちと教職員とが心をついにし「チーム志津小」として取り組んでまいります。その強力な支えとなるのが保護者の皆様や地域の方々のお力添えです。本年度も本校の教育充実のために、温かいご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

◇ 目指す児童像 ◇ 「かしこく やさしく たくましく」

【し】 しっかり考え学習する子（学力向上）

○よい姿勢（ゲー・ペタ・ピン）でしっかり話を聞く

○思いや考えを伝え合える

【づ】 つながりを大事にする子（豊かな心）

○気持ちのよいあいさつ・返事ができ心を合わせて歌える

○やくそくや時間を守り安全に生活する

【つ】 つよい体をつくる子（体力向上）

○外でよく遊び元気に運動する

○自ら進んで働く

【こ】 こころ配りのできるやさしい子（いじめ防止）

○自分と他の人を大切にする

○だれにでもやさしく親切で、いじめを絶対許さない